

動詞「殺す」の多義構造

—日本語教育の観点から—

李 澤 熊

要 旨

本稿は、動詞「殺す」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性（多義構造）を明らかにすることを旨としたものである。分析の結果、「殺す」について5つの多義的別義を認定することができた。別義間の関連性については、比喩（隠喩（メタファー））の観点から考察を行い、5つの別義間の関連性を明らかにすることができた。

次に、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察した。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、それぞれの別義において想定され得る「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討した。

キーワード

多義語、多義構造、比喩、コロケーション、誤用例分析

目 次

1. はじめに
2. 「殺す」の意味分析
3. 日本語教育の観点からの考察—コロケーションの提示と誤用例分析—
4. まとめ

1. はじめに

動詞「殺す」は基本動詞として扱われ、日本語教育においても重要な学習項目の一つとなっている。しかし、「殺す」は多様な意味を担っている

多義語^(注1)であるため、その学習指導方法というのは必ずしも容易ではない。

さて、現在刊行されている辞典・辞書類を調べてみると、動詞「殺す」は多義語として扱われているが、それらの意味を選んで掲げる基準は必ずしも明らかではない。また、当然のことながらそれぞれの意味の相互関係も不明確である。そこで、本稿ではまず「殺す」が持つ複数の意味を記述し、それらの複数の意味の関連性（多義構造）を明らかにする。

次に、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察する。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、各別義において想定され得る「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討する。

さて、初山（2001：33）は「多義語の複数の意味には相互に何らかの関連が認められるのであるから、個々の多義語の分析にあたり、その関連の実態を明らかにすることが課題となる」とし、多義語分析の課題として「複数の意味の相互関係の明示」を提案している。また、「メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が、複数の意味の関連づけに重要な役割を果たすと考えている」と述べている^(注2)。本稿では、「殺す」の複数の意味の関連性を比喩の観点から考察する。なお、それぞれの定義と具体例（の一部）は初山・深田（2003：76-87）、初山（2002, 2010）に従い、以下のように示す。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。「類似性に基づく」というのは、2つの事物・概念に類似性が内在しているというよりも、人間が2つの対象の間に主体的に類似性を見出すことを表していると考えたほうが適切である。

例) 抽象的な類似性に基づくメタファー：「故障」とは本来〈機械などが正常に機能しなくなること〉であるが、「肩

の故障で、今シーズンを棒に振ってしまった」というように、「人間」に関して使われる場合もある。この場合の「故障」は〈スポーツ選手などの体（の一部）が正常に機能しなくなること〉である。この新しい意味は、〈正常な機能が果たせなくなること〉という本来の意味との共通点（つまり、抽象的な類似性）に基づくメタファーと考えられるものである。

シネクドキー：より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。なお、より一般的な意味とは、相対的に外延が大きい（指示範囲が広い）ということであり、より特殊な意味とは、外延が小さい（指示範囲が狭い）ということである。

例) 「人」はより一般的な意味としては概略「人間一般」であろうが、「人に頼ってはいけない」における「人」は〈自分以外の人間〉を表し、「政界に人なし」における「人」は〈優れた人間〉を表している。つまり、いずれの場合も、「人」という語が〈人間一般〉という意味よりも特殊化された意味で使われていることになる。

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

例) 時間上の隣接性：「この問題を前にして、頭を抱えてしまった」における「頭を抱える」は、〈困り果てる〉といった意味である。「頭を抱える」という表現でこのような意味を表せるのは、私たちは、困り果てるという精神状態のときに、頭を抱えるという動作をする場合があるからである。つまり、〈困り果てる〉という精神状態と〈頭

を抱える〉という動作が同時に生じることに基づき、本来は動作を表す「頭を抱える」という表現で、〈困り果てる〉という意味も表していることになる。

手段と目的の関係：「目をつぶる」の場合、字義どおりの動作の意味と「今度だけは目をつぶってやろう」などにおけるおよそ〈見なかったことにする〉という慣用的意味がある。この場合、字義どおりの動作と〈見なかったことにする〉ということは、手段と目的の関係にあると考えられる。つまり、〈目をつぶる〉という動作を手段として、〈(対象を) 見えないようにする / (対象を) 見なかったことにする〉という目的を果たすということである。

2. 「殺す」の意味分析

本稿では、「殺す」について5つの多義的別義を認め、考察を行う。

2. 1 多義的別義 (1) ^(注3)：〈人 [組織・動物] が〉〈何らかの方法によって〉〈生き物 (特に、人や動物) を〉〈死に至らしめる〉

- (1) 最近、家族や身内を「殺す」事件が増えている。
- (2) 放射線を用いて、癌細胞を「殺す」。
- (3) ライオンがシマウマに「殺される」なんて、聞いたことないよ。
- (4) 最近のモデルガンは、蜂などの昆虫くらいなら簡単に「殺せる」。
- (5) テロ集団による無差別爆撃によって、多くの市民が「殺された」。

別義(1)は、人や動物などの生き物に対して、刀や銃、毒などを用いて命を奪う、つまり死に至らしめることを表す。なお、「惜しい人を「殺して」しまった」というように、不注意など、自分の落ち度で人を死に至らしめることを表す場合もある。これと関連して、他動詞の中には「電柱

に車を「ぶつけた」ためにドアが開かなくなってしまった」、「冷蔵庫の野菜を「腐らして」しまった」などのように、自分の意志で行った行為でなくても用いられる場合がある。この時、「責任、後悔、失敗」の気持ちを表す場合が多い。

さて、人間を「肉体」と「魂（精神）」に分けて考える立場があり、周辺的ではあるが「肉体を「殺す」ことはできますが、魂を「殺す」ことはできません」「いじめは心を「殺す」殺人だと考えている」などのような使い方もある。

2. 2 多義的別義（2）：〈人が〉〈生理現象や感情を〉〈人前に出さないようにする〉

- (6) 夜中に目を覚ますと、キッチンで妻が声を「殺して」泣いていた。
- (7) 自分の気持ちを「殺して」相手の気持ちを優先させることも、時には必要です。
- (8) 刑事が闇の中で息を「殺して」、じっと犯人の様子をうかがっている。
- (9) 電車の中で若い女性が、口を開けて居眠りしている隣の席のおじさんを見て、声を「殺して」笑っている。
- (10) チーターは気配を「殺して」そっと獲物に近づき、一気に襲いかかります。

別義（2）は、別義（1）と異なり、働きかける対象は（人間の）生理現象や感情である。別義（1）は人や動物の命を奪うことによって、（結果的に）動かない状態にするということを表すが、別義（2）は（人間の）生理現象や感情に対して、それを人前に出さないようにするということを表す。つまり、声であれば「聞こえないようにする」ということであり、息であれば「呼吸の音を出さない」ということである。ただし、いずれも「（ある対象に対して）動的な状態から、静的な状態に変化させる」という

点では共通している。従って、別義（2）は、別義（1）から隠喩（メタファー）によって意味拡張が成り立っていると考えられる。なお、一般的には人間に対して使われるが、例（10）のように、動物の場合に用いられる場合もある。

2. 3 多義的別義（3）：〈人が〉〈自分または他の人や物が持つ〉〈本来の〉能力や特性などを〈発揮・発現できないようにする〉

- (11) ハーブを使って、魚や肉の臭みを「殺す」。
- (12) 自分の個性を「殺して」まで、人に迎合する必要はないと思う。
- (13) レモンをかけすぎると、魚自体のうま味を「殺して」しまう。
- (14) あのピッチャーは、スピードを「殺した」カーブを投げるのが得意だ。
- (15) 無能な上司が優秀な部下の能力や才能を「殺して」しまうケースは少なくない。

別義（3）は、別義（1）と異なり働きかける対象が、人や物が持つ（本来の）能力や特性である。別義（1）は人や動物の命を奪う、つまり命の存続を断絶するということを表すが、この別義（3）は人や物が持つ能力や才能、特性が発揮・発現できないようにするということを表す。ただし、いずれも「ある対象物が存在しつづけないように、断絶・遮断する」という点では共通している。つまり、別義（3）は、別義（1）から隠喩（メタファー）によって意味拡張が成り立っていると考えられる。なお、「調味料が素材の持ち味を「殺す」ことになってはいけない」「ハーブは肉の臭みを「殺して」くれる効果がある」などのように、もの（の作用）が主語として用いられる場合もある。

2. 4 多義的別義（4）：〈(スポーツや勝負事などで) 人が〉〈相手に 対して〉〈何らかの方法によって〉〈活動や動作をできないよう にする〉

- (16) 牽制球で、走者を {殺して} ピンチを凌いだ。
- (17) 中手とは、囲碁で相手の石を {殺す} ために用いる手法のことです。
- (18) (相撲で) 相手の差し手を {殺して} 一気に寄る。
- (19) ピッチャーとショートの見事な連携プレーでランナーを {殺した}。
- (20) 横綱は利き腕を {殺されても} 慌てることなく、落ち着いて相手を押し出して連勝を飾った。
- (21) 二局目は序盤でいきなり隅の石を {殺され}、呆気なく負けてしまいました。

別義（4）は、別義（1）と異なり、スポーツや勝負事などの対戦相手が問題となっている。別義（1）は人や動物の命を奪うことによって、(結果的に) 動かない状態にするということを表すが、別義（4）は対戦相手に対して何らかの方法によって、それ以上試合・競技が継続できないようにするというを表す。ただし、いずれも「ある人に対して、それ以上活動・動作ができない状態にする」という点では共通している。つまり、別義（4）は、別義（1）から隠喩（メタファー）によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

なお、この別義（4）は特に野球において、打者・走者をアウトにするということを表す場合が多い。また、相撲では相手の差し手の働きを封じるということを表す。さらに、囲碁では相手の石を攻めて目が二つ以上できないようにするというを表す。

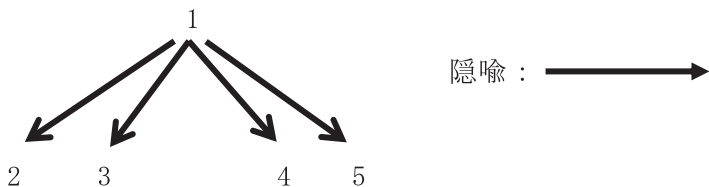
2. 5 多義的別義 (5):〈人が〉〈美貌や性的魅力によって〉〈異性を〉 〈夢中にさせる〉

- (22) 最近流行りの歌で心を射抜いて、ファンを「殺す」。
- (23) キュートなアイドルが、投げキスで観客を「殺す」。
- (24) 彼女のあの視線は、まさに男を「殺す」 眼差しだよな。
- (25) 演歌の王子様が、流し目で女性ファンを「殺す」。
- (26) あの役者と言えば、かつて女性を目で「殺す」 ことで有名だった。

別義(1)は、問題となる対象が人や動物の命であるのに対して、別義(5)では人の(異性に対する)心情となっている。さて、一般的に異性の美貌や性的魅力に惹かれて夢中になった場合、放心状態になりボーっとしたり、周りのことは何も目に入らなくなったりすることが多い。このような状態は、別義(1)の人や動物が殺され、(結果的に)活動・動作ができなくなった状態と似ている側面がある。つまり、別義(1)と別義(5)は、「(ある対象に対して) 動的な状態から、静的な状態に変化させる」という点では共通している。従って、別義(5)は、別義(1)から隠喩(メタファー)によって意味拡張が成り立っていると考えられる。

以上、本節では「殺す」について、5つの多義的別義を認め、分析を行った。また、別義間の関連性については比喩の観点から説明した。なお、「殺す」は以下のような多義構造を成している。

〈図1〉「殺す」の多義構造



3. 日本語教育の観点からの考察－コロケーションの提示と誤用例分析－

本節では、以上の「殺す」の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察する。具体的には、いくつか注目すべき別義の「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、それぞれの別義において想定され得る「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討する。

3. 1 多義的別義 (1)

「コロケーション」

〈組織〉が：国家、政府、軍、武装集団、マフィア、暴力団

〈生き物〉を：人、人間、子供、息子、親、家族、若者、兵士、住民、動物、猫、犬、ペット、細胞、菌、虫

〈手段・方法・道具〉で：残酷な方法、拷問、空爆、銃、手、剣、ナイフ、刀、薬、ガス、矢、武器

〈原因（理由）・目的〉で：浮気が原因、反逆罪、喧嘩、嫉妬、保険金目的、金目当て、口封じ

〈場所〉で：戦場、強制収容所、自分の部屋、シャワー室、実験室、路上、密室

〈様態〉：すぐ、次々と、あっさり、平然と、簡単に、平気で、短時間で、無残に、残虐に、一撃で、確実に、勝手に、密かに

「誤用例」

(27) a ? 山田先生が学生を {お殺しになりました}。

b ○ 山田先生が学生を {殺しました}。

→ 「殺す」のような反社会的な意味を含む動詞は敬語表現（尊敬語）にしにくい。ほかにも「殴る、盗む、捕まる」のような動詞が挙げられる。

(28) a ? 昨日、太郎を二度 {殺した}。

b ○戦争の記録を廃棄することは、戦没者を二度 {殺す} ことになる。

→ 生き物の命は一つしかないので、複数回「殺す」ことはできない。

3. 2 多義的別義 (2)

「コロケーション」

〈人〉が：警察、生徒たち、観客、兵士

〈生理現象・感情〉を：息、声、感情、欲望、気持ち、気配、思い、笑い、
怒り

〈様態〉：じっと、一生懸命に、一齐に、必死に、思わず、そっと、静かに、
ひっそりと

「誤用例」

(29) a ? くしゃみを {殺す}。

b ○くしゃみを {我慢する}。

(30) a ? 涙を {殺す}。

b ○涙を {こらえる}。

→ 意志によるコントロールが難しい生理現象には使いにくい。

(31) a ? 友達と一緒に感情を {殺した}。

b ○友達と一緒にネズミを {殺した}。(別義 (1))

→ 生理現象や感情などは基本的に一人で行うものであるため、動作の仲間を表す「と一緒に」とは共起しにくい。

3. 3 多義的別義 (3)

「コロケーション」

〈人〉が：(無能な) 上司、ピッチャー、教師、監督、運転手

〈能力・特性〉を：才能、能力、魅力、旨み、持ち味、臭み、人格、利点、

個性、(打球の) 勢い、スピード

〈手段・方法・道具〉で：あの手この手、組織の圧力、ブレーキ、見事な
コントロール、斬新な方法、加熱、香辛料、日
本酒、生姜

〈様態〉：簡単に、一気に、数秒で、ことごとく、確実に、ちゃんと、しっ
かり

〔誤用例〕

(32) a × 先生が学生の英語力を {殺す}。

b ○ 先生が学生の個性を {殺す}。

→ 学習により身につけた、単なる実力などには用いられない。

(33) a ? 彼の身長を {殺して} しまった。

b ○ (昨日の試合では) 彼の高身長の利点を {殺して} しまった。

→ 何らかの能力や特性として捉えられなければ、用いることができない。

3. 4 多義的別義 (4)

〔コロケーション〕

〈人〉が：野手、キャッチャー、横綱、(囲碁で) 名人

〈相手 (身体部位)・道具〉を：打者、走者、ランナー、相手バッター、差
し手、利き腕、右肘、白石、隅の石

〈手段・方法〉で：牽制球、連携プレー、好守備、素晴らしい送球、上手
ひじ (で差し手を殺す)、同じやり方

〈様態〉：簡単に、あっさり、呆気なく、速攻で、一瞬で、確実に、あっという間に

〔誤用例〕

(34) a ? (サッカーで) 相手チームのエース・ストライカーを {殺す}。

(別義(1)はOK)

b○(サッカーで)相手チームのエース・ストライカーを{抑える[封じる]}。

→ 基本的に、野球で打者・走者をアウトにする場合に用いられる。

(35) a×相手の足を{殺す}。

b○相手の足を{止める}。

c○相手の差し手を{殺す}。

→ 身体部位の場合、基本的に相撲で、相手の差し手の働きを封じることがを表す場合に用いられる。

3. 5 多義的別義(5)

「コロケーション」

〈人〉が：若手俳優、人気アイドル、演歌の王様、あの役者、人気歌手

〈人〉を：女性ファン、男性、観客、女性のギャラリー、若い女の子、世のおじさん達

〈手段・方法〉で：目、流し目、鋭い目つき、瞳、笑顔、投げキス

〈様態〉：一瞬で、数秒で、簡単に、瞬時に、確実に、笑みを浮かべただけで

「誤用例」

(36) a?華麗なシュートでゴールを決め、ファンを{殺した}。

b○華麗なシュートでゴールを決め、ファンを{魅了した}。

c○キューتنا笑顔で、ファンを{殺す[魅了する]}。

→ 基本的に、異性の美貌や性的魅力に惹かれた場合に用いられる。

(37) a?愛娘の笑顔に{殺されそうになる}。

b○愛娘の笑顔に{メロメロになる}。

→ 基本的に、恋愛の対象となる異性に対して用いられる。

4. まとめ

以上、本稿では動詞「殺す」が持つ複数の意味を記述し、それら複数の意味の関連性（多義構造）について考察した。その結果、「殺す」について5つの多義的別義を認定することができた。別義間の関連性については、比喩（隠喩（メタファー））の観点から考察を行い、5つの別義間の関連性を明らかにすることができた。

次に、以上の分析に基づき、それぞれの別義の効果的な学習指導方法について考察した。具体的には、各別義における「コロケーション」を提示することによって学習を促すとともに、それぞれの別義において想定される「誤用例」も提示し、その理由・原因について検討した。

付記

本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト『日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明』において筆者が担当した『殺す（国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』（<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>））』に修正・加筆したものである。

注

- 1 国広（1982：97）は、多義語について『多義語（polysemic word）』とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と定義している。本稿においてもこの定義に従う。
- 2 初山（2001）は多義語分析の課題として、（1）（それぞれ確立した）複数の意味の認定、（2）プロトタイプの意味の認定、（3）複数の意味の相互関係の明示、（4）複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明という4つの課題をあげている。本稿では（1）と（3）の課題を中心に検討する。
- 3 本稿では、別義（1）を「殺す」のプロトタイプの意味として考える。なお、初山（2002：107）は、多義語のプロトタイプの意味は「複数の意味のなかで最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、中立的なコンテキストで最も活性化されやすい（想起されやすい）」といった特徴を有する」と説明している。

参考文献

- 北原保雄 (2011) 『明鏡国語辞典』第2版, 大修館書店.
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』, 大修館書店.
- 新村 出 (編) (2008) 『広辞苑』第6版, 岩波書店.
- 松村 明 (編) (2006) 『大辞林』第3版, 三省堂.
- 舩山洋介 (1994) 「形容詞『カタイ』の多義構造」『名古屋大学日本語・日本文化論集』2, pp.65-90, 名古屋大学留学生センター.
- 舩山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」『認知言語学論考』1, pp.29-58, ひつじ書房.
- 舩山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』, 研究社.
- 舩山洋介 (2010) 『認知言語学入門』, 研究社.
- 舩山洋介・深田 智 (2003) 「第3章 意味の拡張」, 松本 曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻), pp.73-134, 大修館書店.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 森山 新 (編著) (2012) 『日本語多義語学習辞典 動詞編』, アルク.
- 山田忠雄・柴田 武他 (編) (2012) 『新明解国語辞典』第6版, 三省堂.

例文出典

※本稿における例文は、以下のコーパスを参考にして作った作例である。

- (1) NINJAL-LWP for TWC (<http://corpus.tsukuba.ac.jp/>)
- (2) KOTONOA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

(い てぐん・准教授)